

「みんなの森」エリアには、タケノコ手押しポンプや、災害時に活用できるかまどベンチも設置しています。

「みんなで育てる森プロジェクト」

地域に愛される施設でありたい

地域のニーズに応じてさまざまな地域貢献事業を実践する社会福祉法人。

今回、施設内に緑あふれる広場をつくり、地域に必要とされる施設運営を目指した取り組みを紹介します。

五感を刺激する三つのエリア

施設建設に合わせ土壌改良工事を行い、対象地の全面に植生を配し、緑豊

子どもたちが

自然とふれあえる森にしたい

東大阪市を中心に高齢者福祉事業や保育事業を展開する社会福祉法人玉美福祉会は、平成27年9月に、総合ケアセンター「八戸ノ里向日葵」を開設。それに伴い敷地内の学校跡地（1000㎡）を改修し、豊かな緑とふれあえる広場を作りました。

さらに施設建設以前は、学校のグラウンドの形をとめていて、「せつかく広々とした敷地がもつたない。子どもたちが自然とふれあえる森にしたい」と思った」と語るのは、発案者で、系列の認定こども園「たいよう学院」園長の西島由美子さん。

公益財団法人都市緑化機構と一般財団法人第一生命財団が主催する「緑の環境プラン大賞 シンボル・ガーデン部門」に応募し、「国土交通大臣賞」を受賞しました。

ではありましたが地区福祉会を主体とした、子ども食堂を開始しました。

「こころさま」ありがとうの飛び交う食堂

活動では、安全面と雰囲気づくりに特に配慮しています。夜間開催ということもあり、参加は事前予約制にし、保護者が同伴できない場合も、申込時に住所や状況を確認することで、安全確保に努めています。

また、子どもたちが安心して過ごせる雰囲気をつくるため、「距離感」を大切にしています。子どもたちの「食事マナーを守る」「あいさつをする」などの自主的な取り組みをさりげなく褒めることで、居心地のよさを育んでいます。運営には福祉会のメンバーのほか、



福祉会副会長
子ども食堂代表 宮下 育己さん

約30人の登録ボランティアが調理や配膳、子どもたちとの交流などの場面で関わっています。高校生や大学生ボランティアも参加しており、世代を超えた協力が生まれているのもこの食堂の魅力の一つです。

思いをつなげる

日頃のやり取りのなかで、家庭の状況に気づき、支援につながったこともあります。あるシングルマザーの家庭では、子どもが不登校になり、母親はつき添いのため仕事時間が減少。経済的にも精神的にも負担が大きくなっていました。LINEでのやり取りを通じてその状況を知った宮下さんは、フードバンクなどの支援につなげました。

また、いつも参加費を細かな硬貨で支払う子どもを気にかけて、主任児童委員につないだこともあります。

箕面市社協の地区担当の梅田靖さんは、「子ども食堂などの居場所の活動は、小中学生や子育て世代など今まで地域とのつながりが少なかった方が、かわる機会になっています」と言います。

家庭の事情は表に出にくいものです。が、小さなサインに気づき、見守ることで、単なる「食事提供の場」ではなく、「つながりの起点」となっています。

自然ならではの課題も

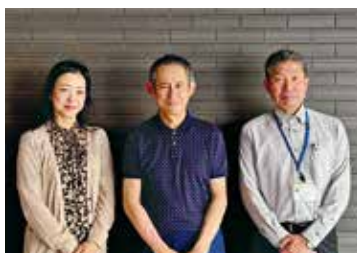
広場の維持は定期的に専門業者に依頼。それでも広い敷地のため、手入れが追いつかず、草むしりは理事長などの職員が行うとともに、入居者がお手伝いを買って出たこともあります。

「さくらんぼを鳥に全て食べられました」と笑いながら語るのは、八戸ノ里向日葵の施設長の三木一雄さん。「試行錯誤しながら、入居者や子どもたちと収穫を楽しむものを育てていきたい」と抱負を話します。

緑あふれる

都会のオアシスにしたい

「今後は、少し距離のあるこども園の子どもが遊びに来られるようにしたい。今はまだ森と呼ぶには程遠い庭ですが、いずれ緑あふれる都会のオアシスにしたい」と西島由美さんは、力強く語りました。



取材にご協力いただいた玉美福祉会の皆様、左から西島由美子さん、西島善久さん、三木一雄さん



ピオトープには、蝶々やトンボが遊びに来ています

【地区福祉委員会活動】vol.1

子ども集まる夜の食卓

箕面市 豊川南小地区福祉会

『地区福祉委員会』は、市町村社協の内部組織として、おおむね小学校区単位につくられた住民のボランティア組織です。地域によっては、校区福祉委員会や地区福祉会、地区社協と呼ばれることもあります。昭和30年代から組織化がはじまり、現在では見守り活動や居場所づくりを通じて、社会的孤立を防ぎ、地域で安心して暮らせる環境づくりを支える小地域福祉活動の基盤となっています。

今年度は、地域共生社会の実現に向けた取り組みの中でも重要な役割を果たしている『地区福祉委員会』にスポットをあて、活動を支える人々の思いや工夫に迫ります。



カフェスペースで実施。夜の時間でも多くの子どもたちが訪れる。子どもは1食100円で提供

コーヒショップ前の子どもたち

子ども食堂立ち上げのきっかけは、福祉会副会長で、食堂の代表である宮下育己さんの気づきからです。

15年前、社協からの呼びかけで子ども食堂の開設を提案されたことがありましたが、当時は「この地域に必要とは思えない」と感じたといいます。

しかしある日、コーヒショップ前で集まって宿題をしている子どもたちに出会いました。理由を聞くと、「家に帰っても誰もいないから、みんなでここにいる」と言われました。そのときに、「この地域にも子どもたちの『居場所』が必要なんだ」と実感したそうです。

その気づきをきっかけとし、コロナ禍

かな庭として整備。建設以前からあった藤棚を残しつつ、特色をもつ三つのエリアを設定しました。

庭の中心に位置する「みんなの森」は、緩やかに高低差を設けて、散策が楽しくなるように工夫し、「いきもの水辺」エリアには、子どもたちが自然を観察し、生き物とふれあえるピオトープを設けました。「美りの畑」エリアには、果樹を中心に、育てながら食を楽しむ場とし、三つのエリアは相互に関連しあいながら、五感を刺激する体験の場となっています。

入居者と地域の憩いの場

併設するデイサービスセンターには、庭に咲いたシロツメクサを花瓶にさして飾り、利用者が小径をリハビリの歩行訓練に活用しています。さらに、ケアハウスの入居者にとつては、散歩コースとなっており、介護予防にもつながっています。

また、施設主催のお祭り「みなづきフェスタ」では、来場者が緑を鑑賞しながら、食事やゲームを楽しむなど、地域住民の憩いの場にもなっています。